

師の重さをする

渡部 武

高校（旧制）に運良く合格し、その入学式の後、クラス一同が教室で待っていると、安部能成校長が佐藤得二主事と来られた。共に先輩であるので、一同は敬意とあわせて親しみを感じて迎えた。安部先生は気軽にわれわれ新入生に、出身地は何処だ、母校は、何かやってきたことはあるか、高校に何を期待するか、何をやりたいのか聞かれ、訓話は特になかった。対談の中で今に残っているのは、一つは「この三年間の授業内容は一年間でできてしまうほどのものだ。暇が有り余るほどあるはずだから、何かやるんだな」という言葉。もう一つは「哲学は天才のやることだ、教養にとどめておくんだな」という言葉。ひとり、安部先生は哲学者だから、それじゃ先生は天才ですかと、勇敢なというか怖いもの知らずというか、聞いたところ、若気の致すところだなと苦笑された。

旧制高校時代は心に残る思い出が多いが、そのひとつひとつを書きおきたい。高校二年半（三年のころを戦争のため半年短縮された）を通してドイツ語を教授してくださった Petzold 先生。白い眉、白い口髭、あご鬚、白哲の哲人の風貌は今も懐かしく思い出される。先生は Goethe の「Faust」を二年から用いられた。当時は本が手に入らない時代で、岩波文庫でさえ不自由、ましてレクラム文庫は入手不可能であった。もちろんコピー機など発明されていない時代である。先生は「Faust」を読み上げられ、われわれ生徒は筆記し、時折先生がドイツ語で注釈をされるといふ授業。参ったのんの、全然わからない。先生なんとかしてくださいという、「天下の秀才にできないはずはない」（日本語が全然できないという？ 先生の唯一の日本語という伝説）と剣もほろほろ、秀才の間に紛れ

込んだ小生のような凡才は、たまつたもんでなかつた。

昭和一七年二年生の五月、ヒットラーに率いられるナチス軍がソ連の国境線を突破し、モスクワを目標して侵攻を開始した。複雑な思いを抱いたクラス的面々は、温厚でリベラルな先生が独ソ戦開始についてどうお考えになるか、期せずして聞いてみようということになり、自信のあるのが黒板にドイツ語で、教授はヒットラーの独ソ戦開始をどう考えられるかと板書し、先生の意見が聞けるのを期待して待った。先生は教室に入つてこられ、黒板の字を読まれた途端、いつも穏やかなかんばせが朱を注いだようになると同時に、怒りの叫びを発して教室を飛び出して行かれた。われわれは何か悪いこととした間の悪さを感じながら教室に居続けた。

当時一高には特設高等科なるものがあつて、東アジアからの留学生が来ていた。教練の時間が同じであつたので、歩兵銃や機関銃を持って配属将校の指導の下に、一緒に散開し匍匐し突撃の訓練をうけた。彼らはどんな気持ちでやつていたのだろうか。

その一人張君に寮祭の時に、日本人はなぜ天皇を神として絶対視し尊崇するのかと質された。帝国憲法で、教育で、そう叩き込まれてきたことであり、あれやこれやと語り合つたが、彼は全然わからないよの一点張りで、納得してもらうどころでなく、かえつてこちらが窮するといつた有様であつた。張君は戦後台湾で実業家として成功し、現在は息子さんに後を任せている。

ペッツォールド先生と張君に触れて得たものはまことに大きい。異質な世界の在ることは観念的には了解していたが、その並み大抵ではない重さを身をもって知つた点で、私にとっては得難い体験であつた。

さて、安部先生は剛直、己を曲げず、崩すことが無い。自己の信条、信念にはずれる事に対しては妥協しようとはせず、極めて頑固であり、人に対しても容れる容れないが明確であつた。そのためにか先生に対する評価はぞっこん惚れ込むか、嫌うかの両極に分かれたようだ。戦時下、世の大勢を無視できなくなつていた時代に、それで押し通されたことは、貴重なことであるとともに、人間のあり方として教えられるところがあつた。

ある事で安部先生にお願いがあがったことがあった。快く会ってくださった。お願いの件については、かなり丁寧な事情をお話し、その間先生は嫌な顔もせず耳を傾けて下さり、分かっていただけのように感じたが、結局は納得しかねる所があると断られた。同じ件で和辻哲郎先生を練馬のお宅にお尋ねした。先生はよく分かりましたとおっしゃって、早速に納得していただくことが出来た。外見と内面ともに相応して、ごつつい安部先生、スマートな和辻先生という印象を持ったものである。

高校時代に『人間の学としての倫理学』を読んで、これはいけると思ったのが和辻先生との出会い。先生の許に参じたが、二ヶ月後に学徒動員。お言葉を書きに行ったら「莫妄想」と書いて下さり、先生と古川先生の校訂になる岩波文庫『葉隠』を戴いた。「莫妄想」には大いに戸惑った。分かるような気もするが、それでいいのかなとも思ったりもした。無事復学し、先生の退官まで二年間勉強させていただいた。

倫理学の講義は、『倫理学』の中巻、国家を中心に人倫共同態に関するものであった。倫理学の体系の完成に専念され、かつ無謀な戦争についての反省をなさっておられたときで、講義は腰掛けたまま、静かに噛みしめるように、話を進められていかれた。ハイデッガーの人間存在の解釈については、追いながら講義を進められ、時にはしばし考え込まれることもあったのが印象的であった。そして、終りにハイデッガーの存在論における空間性の欠如を批判されたとき、成る程そうかと納得したのを覚えていた。

演習のひとつは、『鎖国』に關係するもので、異国叢書の講読であった。一人に一冊ずつ割り当てて進められた。先生は別に持っておられ、学生は割当の一冊だけだから、担当学生の発表を聞いて、不明の点を質問したり、おかしいと思ったことを質したり、山勘で議論をふっかけたりするといった具合で、楽しく面白かった。先生はほとんど無言で静かに聞いておられたが、時折、先生が学生の発表にそんなことが書いてありましたかなどと聞かれるので、発表にはみな気を使った。約三〇〇ページ、耶蘇会士の本国などへの報告がほとんどであるので、何を問題にして発表するかには頭を悩

ました。ある学生が、気を使ひすぎたのか、一冊のダイジュストをやった。すると待ちかねたように、先生は立ち上がって黒板に「Schafsm」と書かれ、著者の言いたいことをとらえなくては駄目だと、かなりきつい口調で戒められた。先生は、学生の時美学の講義で、大塚保治教授からしばしば Schafsm の重要さを教えられたと付け加えられた。この時には静かに見える先生の中に秘めた激しさ・厳しさともある熱いものを感じさせられた。

演習のもうひとつは、津田左右吉著『論語と孔子の思想』を共通のテキストとして行われた。先生は津田教授を現代稀にみる篤学の士、稀にみる学問上の情熱があり名利に係わらない非常な人格者と評価されているが、先生と津田教授とは学問の方法を異にし、歴史的事実の捉え方が異なっていることもあって、本書に対する先生の批判は極めて厳しく、本書の内容をことごとく否定せんばかりであった。学問とはかくも厳しいものと、強い感銘を受けた。この演習では、孔子の仁の思想に関する部分を担当し、苦心惨憺して発表したが、仁についての定説はどうなっていますかと、我流の強引な解釈を戒められた。

研究室の雑談の思い出ひとつ。戦後のことでもあり、積極的な戦争協力を理由に教職を追われる先生もあって、左翼勢力は手を汚さなかったのは我等だけというわけで、学内は我らが天下と勢い盛んに活動を展開していた。先生には京大時代の忌まわしい思い出と重なって、こうした状況を苦々しく思っておられたのではないか。そうした動きに触れて先生は、「今の左翼の連中はいい加減だ、だいたい基本がなっていない。唯物史観にしたって、戦前の左翼の方がまじめで真剣に研究していたし、その理解もしっかりしていた」と強く批判された。倫理学科の学生に各自の自由にまかせながらも、やるからには基本を固めてしっかりやり、流されないよう注意されたことがあった。

良き師の出会いを待つ幸せを得ながら、それを当り前のこととして過ごしてきた。師と一期一会の重さに耐えかねる自分の姿をみる今である。

(わたなべ たけし・日本思想史)